人身売買――解決にむけての道筋を考える

原 由利子(IMADR事務局次長)



IMADR-JCブックレット12 『講座 人身売買』 さまざまな実態と解決への道筋-編集•発行:反差別国際運動 日本委員会(IMADR-JC) 発売:解放出版社/A5判/192頁 ISBN978-4-7592-6223-0 発行年月:2007年7月 定価:1,200円+税

※IMADR-JC会員特別価格: ¥1,000 (稅込·送料実費別途)/ 10冊以上一括購入: 冊あたり¥1000 (税込・送料実費別途) *購入を希望される方は事務局に で連絡ください。で注文はホームページ (http://www.imadr.org/japan) からもできます。

目 次

第1回 アジアにおける人身売買との闘い 第2回 日本に定住した 人身売買サバイバーのその後 第3回 人身売買の被害回復支援とは 第4回 業者が仲介する国際結婚について 第5回 フィリピンから日本への 搾取的移住を考える 第6回 外国人研修•技能実習制度 第7回 排除ではなく共生へ 第8回 人身売買を本当になくすために

連続講座「グローバル化の中の 人身売買」の様子

貨幣が人間の価値より重んじられ、人が貨 幣に換算され売買される人身売買は、弱肉強 食の競争原理を根幹とする市場経済のグロー バル化で益々深刻な事態となっている。一方 で人身売買への対策として行なわれている取 り締まり強化や出入国管理の厳格化が進むほ ど、女性たちによる自力での移住が困難にな り、危険をともなっても仲介業者を介して入 国せざるを得なくなるという現実がある。

「加害者」を取り締まるだけでは問題解決 につながらないのではないか。この問題は私 たちが生きる社会のありようを鏡のように映 し出している現象であるにもかかわらず、そ れが表層的にしか捉えられ、伝えられていな いのではないか――このような問題意識を出 発点に、反差別国際運動日本委員会(IMADR-JC) は昨年、連続講座「グローバル化の中の人身 売買」を開催し、人身売買について、それを 生みだす構造に迫り、人身売買された人びと がその過程で直面するさまざまな問題に光を 当て、日本社会とのつながりを考え、問題解 決にむけての道筋をさぐった。このたびその 内容をまとめて『講座 人身売買――さまざ まな実態と解決への道筋』として発刊したの で紹介したい。

講座では、「人身売買が行なわれる背景に ある新自由主義経済のグローバル化・人種主 義・南北問題を、送り出し国の視点から考え る」「日本に人身売買された人びとの来日前、 帰国後または日本への定住後につながる問題 を考える」「取り締まり強化ではない解決の 道を考える」「性産業への従事以外の形態の 人身売買・搾取的移住を考える」という4つ の点に留意しつつ、左記の8つのテーマを設 定した。活動の現場に「身をおき」、「考え」、 悩みつつ「行動」し続けてきた講師陣だった からこそ、人身売買のさまざまな実態に迫り、 問題のつながりや理解を深めることができた と確信する。

思えば、講座で参加者が毎回問いかけたの が「私たちに何ができるか」であった。第3 回の講座で齋藤百合子さんは、人身売買撤 廃のアプローチが簡単でない理由の1つに、 「人身売買の被害者に対する私たちの視点が いろいろな思いこみ、偏見、差別、無知と無 理解などで曇らされていること」をあげてい る。性産業で働く女性への偏見、貧しくて稼 ぎにきたのだから覚悟の上だったのではとい う先進国側の高みにたった傲慢なる偏見、子 どもはかわいそうだが大人は自分で危険を察 知すべきという、周縁化された女性の脆弱性 に対する無知と無理解は、「まったくの無力 で人の助けや保護がないと立ち上がれないほ どの打ちひしがれた被害者像を求めがち」な ことを指摘している。結果として、非常に限 られた女性だけが人身売買の被害者として扱 われ、そこにあてはまらなければ、稼ぎにき た非正規滞在者としてつかまり強制送還され ることになる。しかし現実には両者の間のグ レーゾーンに多くの女性たちが生きている。 私たちの誰にとっても今できることは、現実 を知り、意識を変えることではないだろうか。

本書が、人身売買という、私たちにつきつ けられた複雑で困難な課題への理解を少しで も深め、その解決に向けての道筋をともに考 え、そのための行動につなげていくことがで きれば、と考えている。

(はらゆりこ)





